

2024年8月18日 説教「とげのある棒をけらず」

使徒の働き 26章1～18節

総督フェストが同席するなかで、アグリッパ王は威儀を正して謁見室に到着しました。そこにパウロは連れてこられました。

1. クリスマンになる前についての証言 (13～17節)

①アグリッパ王の弁明許可 (1)「すると、アグリッパがパウロに、『あなたは、自分の言い分を申し述べてよろしい』と言った。そこでパウロは、手を差し伸べて弁明し始めた。」

アグリッパ王の弁明許可ですが、アグリッパ自身パウロに興味を持っていました。パウロは敬意を表すように手を差し伸べて弁明し始めました。

②パウロの弁明 (2～3)「アグリッパ王。私がユダヤ人に訴えられているすべてのことについて、きょう、あなたの前で弁明できることを、幸いに存じます。特に、あなたがユダヤ人の慣習や問題に精通しておられるからです。どうか、私が申し上げることを忍耐をもってお聞きくださるようお願いいたします。」

弁明の始めは挨拶です。ユダヤ人の慣習、問題に詳しいアグリッパに対して、まずは忍耐を持って聞いていただきたいと願いました。

③パリサイ人として歩んだ日々 (4～6)「では申し述べますが、私が最初から私の国民の中で、またエルサレムにおいて過ごした若い時からの生活ぶりは、すべてのユダヤ人の知っているところです。彼らは以前から私を知っていますので、証言するつもりならできるのですが、私は、私たちの宗教の最も厳格な派に従って、パリサイ人として生活してまいりました。そして今、神が私たちの父祖たちに約束されたものを待ち望んでいることで、私は裁判を受けているのです。」

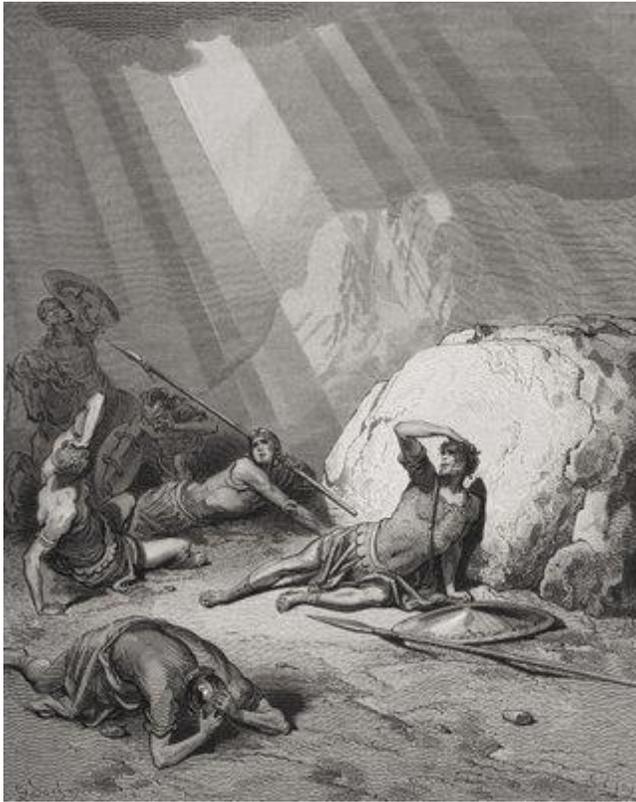
パウロはユダヤ人たちが、自分の若い頃のことをよく知っていると伝えます。自らが厳格なパリサイ人として生活していたこと、そして父祖たちからずっと待ち望んでいることで訴えられていることをも伝えます。

2. 迫害者であったパウロの証言 (18～22節)

①よみがえりを信じて(7～8)「私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでおります。王よ。私は、この希望のためにユダヤ人から訴えられているのです。神が死者をみがえらせるということを、あなたがたは、なぜ信じがたいこととされるのでしょうか。」

パウロは積極的にアグリッパへの伝道を試みています。キリストの復活を伝えるべく、もともとユダヤ人たちも神からの復活を基盤とした約束を信じているのに、今はそのことで訴えられていると述べます。

②以前はイエスに反対をしていたこと (9～10)「以前は、私自身も、ナザレ人イエスの名に強硬に敵対すべきだと考えていました。そして、それをエルサレムで実行しました。祭司長たちからの権限を



授けられた私は、多くの聖徒たちを牢に入れ、彼らが殺されたときには、それに賛成の票を投じました。」

パウロはここで、かつては自分もパリサイ人として、祭司長からの権限で、キリスト教徒を迫害し、彼らを牢に入れ、死刑にするかどうかという時に、賛成票も出していたことを伝えます。

- ③クリスチャンを迫害して (11)「また、すべての会堂で、しばしば彼らを罰しては、強いて御名をけがすことばを言わせようとし、彼らに対する激しい怒りに燃えて、ついには国外の町々にまで彼らを追跡して行きました。このようにして、私は祭司長たちから権限と委任を受けて、ダマスコへでかけますと、」

そして迫害の意気に燃え、悪意で御名をけがさせ、それでも怒りはおさまらず、国外にまで追跡したほどで、ついには権限を授けられて北のダマスコへと向かったと述べます。

3. 天からの光と主の御言葉 (13～18 節)

- ①天からの光が輝き (13～14)「その途中、正午ごろ、王よ、私は天からの光を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と同行者たちとの回りを照らしたのです。私たちはみな地に倒れましたが、そのとき声があつて、ヘブル語で私にこう言うのが聞こえました。『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。』」

ところが、その途上の正午ごろ、天からのまばゆい光を受け、一同は倒れたのです。その時、パウロにヘブル語で「なぜわたしを迫害するのか」という声があつたというのです。

- ②あなたはどなたですか (15～16)「私が『主よ。あなたはどなたですか。』と言いますと、主がこう言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現れて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命する為である。』」

パウロが「主よ、どなたですか」とたずねると、「あなたが迫害しているイエスだ」というのです。そして、「起き、立ちなさい。それは、パウロを奉仕者、証人として任命するためだ」といわれたというのです。

- ③暗闇から光へ (17～18)「わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところへ遣わす。それは彼らの目を開いて、暗闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中であつて御国を受け継がせるためである。』」

パウロが遣わされる目的は、人々の目を開かせ、暗闇に光を注ぎ、罪の赦しを与え、すでに聖なるものとされた人々と共に、神の相続財産を受けようになるためだというのでした。

《結論》パウロがダマスコ途上でキリストと出会った出来事については、使徒 9 章に記され、22 章ではエルサレムにおいて千人隊長クラウデオ・ルシヤの許しを得て、ユダヤ人に対する弁明の中でこれを述べています。しかし、異邦人への派遣のことも盛り込まれた弁明はユダヤ人の大反発を受けています。それに比べると、今回の証しは、アグリッパ王への伝道という意気込みが感ぜられます。自らの救いと異邦人への伝道の召命を伝えながら、アグリッパ王の魂にパンチをあびせていると言っても良い内容です。

まずは、復活について宣べ、キリストの復活を暗に語っています。しかし、ユダヤ人たちは、それまで復活信仰をもっていた者も、いざキリストの復活のことを知らされると、それを拒絶しました。それが人間の罪というものでありましよう。ここで、パウロはそうしたユダヤ人のことを覚えつつも、アグリッパ王をも含めた人間に対して、「あなたがたは、なぜ信じがたいこととされるのでしょうか。」(8 節)と問いかけた上で、復活信仰を促し、キリストを伝えています。また、自らも同じような者であつたけれど、キリストとの出会いを通して、それを受け入れるに至つたのだと証しているのです。

そして、キリストとの出会いを伝えるにあたっては、9 章や 22 章には記されていない言葉が記されていて、印象的です。それは、今朝読んだ 26 章 14 節にある「とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。」という部分です。この「とげのついた棒」というのは、農夫が牛に鋤をつけ、後ろから耕作していく時、右手に持ったとげのついた棒のことです。農夫は牛がまっすぐに歩かない時にこれを使うのです。パウロはクリスチャンを迫害しようとした時に、キリストと出会い、その道を正されました。まさに、その時にパウロは、主からのとげのある棒をける経験をしたのです。ここでは、アグリッパ王にも主なる神にそむき続けるなら、戒めの棒の傷を受けるばかりで、罪を重ねることになりますよと、大胆に警告しているのです。

さあ、ここまで読んで私達もパウロのこのメッセージを自分へのものとして、いきたいのです。あなたはとげのついた棒をけりながら、自分の思うままの道を進みますか。つまりは、生まれながらの肉の性質のままで行きますか。罪は私たちにしつこくまとわりつきます。先週も金田福一先生の本から「繰り返し、繰り返し、悔改めていくこと」を学びました。私達は今こそ主の前に悔い改めていくことが大切です。とげのついた棒をける道とは、強情な自我のままに歩むことです。その道は実際的な安楽があるでしょう。しかし、心の奥底はつらいでしょう。詩篇 23:4 にこうあります。「あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです」。とげのついた棒を主からいただくことは、主からの愛をいただく道です。でも、主の愛がわかったら、悔改めて、もはやとげのついた棒をけらずに、主が示される道をまっすぐに進む決意が必要です。

実を言うと、このメッセージは説教者自身へのものと受け取っています。とげのある棒をけることを平気でやっているからです。厳肅なる神を恐れていないからです。「とげのある棒をけることの痛さを知れ!」と自分にに向けて言いたいと思います。もし、あなたもそう思うなら、一緒に悔い改めていきましょう。